

これぞJV 大手と地元が一体に

佐藤直良の
ぐるり現場探訪
晴れの日も雨の日も

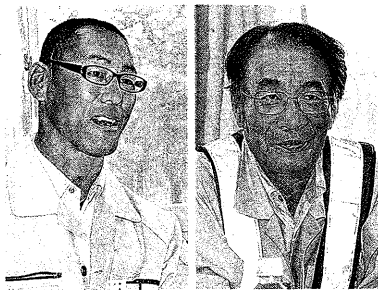


浜松篠原海岸津波対策施設等整備事業(海岸)工事(試験施工1)

西松建設・須山建設・中村組JV

新緑の候、折からの雨の中、浜松駅に降り立つた。このシリーズの副題にもある『晴れの日も雨の日も』は建設通信新聞の担当者がつけたものである。すばらしいタイトルだが初めは感じたが、このタイトルのおかげで、前回の広島は雨、この日は雨。しかし、現場は休まず動いていた。訪ねたのは「浜松篠原海岸津波対策施設等整備事業(海岸)工事(試験施工1)」で、施工は西松建設・須山建設・中村組JV。今回お世話になった地元の中村組は、試験施工を踏まえた本工事の受注が決まっている。

建設通信新聞



石田氏

児玉所長

東日本震災から早いもので3年が経過した。いまでも、その津波の映像は鮮明に残っている。多くの尊い人命が一瞬のうちに失われ、筆者の長い人生の中で最も辛い出来事であった。当時筆者は国土交通省技監の職に就いていた。海岸・港湾はその機能の一部を發揮したが、津波の威力により破壊された姿を前に命じ、明治・昭和・戦後の教訓も踏まえ、ハードソフト対策を総動員し、外力に対して『線防御から多重防御』に転換せよと、担当部長に指示したことを昨日のこのように思い出す。この浜松は、おそなへ、10対1の防備を築造する全国初のケースである。

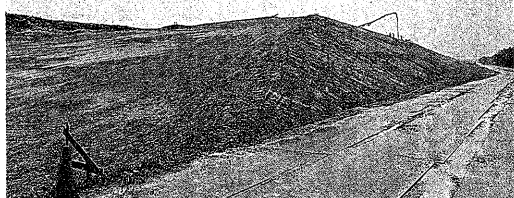
筆者が中部地方整備局長時代の2008年11月、全国に先駆けて建設ICT導入研究会を発足させた。いわゆる情報化施工を先兵に、現場へのICT導入を積極的に推進することが目的だった。その後、ほかの地整が情報化施工推進会議などを設立したが、中部地整だけは建設ICT導入普及研究会と名称を変え、現在394者が参加している。参加数としては全国一である。ここまで牽引してきた中部地整職員の間、まの意欲と努力に、この紙面をお借りして敬意を表する次第である。

幼少期の体験、現場に自然と導く

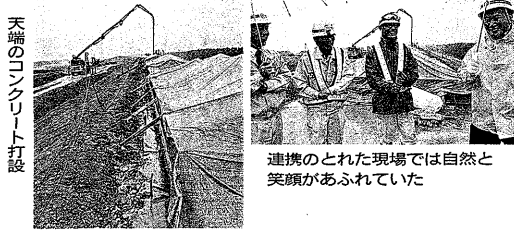
筆者が中部地方整備局長時代の2008年11月、全国に先駆けて建設ICT導入研究会を発足させた。いわゆる情報化施工を先兵に、現場へのICT導入を積極的に推進することが目的だった。その後、ほかの地整が情報化施工推進会議などを設立したが、中部地整だけは建設ICT導入普及研究会と名称を変え、現在394者が参加している。参加数としては全国一である。ここまで牽引してきた中部地整職員の間、まの意欲と努力に、この紙面をお借りして敬意を表する次第である。



現場の説明を受ける筆者(右)



高さ13%程度の防潮堤が後背地の安全・安心を守る



天端のコンクリート打設

現場の説明を受ける筆者(右) 高さ13%程度の防潮堤が後背地の安全・安心を守る 天端のコンクリート打設

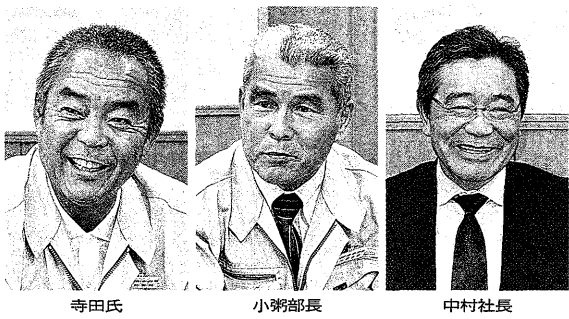
地元の浜松市の中村組の石田孝氏である。石田氏は、既に受注が決定している本工事の現場代理人に就任すること。この場には1910年創業の中村組の中村嘉孝社長、小粥孝成取締役、中村組にも忙しい中、出席いただいた。

試験工事では、基礎地盤改良としてN値15を目標に、浅層混合処理工法であるパワートライエ工法を採用している。この工法は、筆者がよく知る愛知県の加藤建設が特許を有している。その後CSG製造、敷き均し、締め固めを経て天端コンクリート被覆を行う。工事は順調に進捗し、訪問した日がコンクリート被覆の完成日だった。

石田氏の施工に関する説明は一点のよきもなく、施工技術を十分に自分のものとした、すばらしいものであった。当然、筆者からの質問にも的確に対応していた。児玉所長の長年の経験で培われた技術血が注がれた。

が、JVでの仕事を通じて見事に石田氏に伝承されていた。従来とすれば、JVスポンサーの大手・準大手が、地元企業を手招きして使うという図式が数多く見られた。この話をよく聞かされた。これは社風で、この気持ちをもちに社員同士のきずなを深めることが大事だと思っている。『社員は会社に恩義を感じ、会社に恩を返さずと頑張っている。若いころの仕事を語る姿を見て、この人こそ職人精神を持った、真に企業の本質を言っている人だ』と感じた。なお中村組は、入社した社員が途中で転職するケースがほとんどないとのこと。離職率の低さはこの業界、あるいは他産業を見ても誇れるものである。

【建設ICT】
1. 日経
2. 朝日
3. 毎日
4. 読売
5. 岐阜
6. 中日
7. 産経
8. 静岡
9. 伊勢
10. 中部経済
11. 建通
12. 日刊工業
⑬ 建設通信
14. 信濃毎日
15. 日本海
16. 建設工業



寺田氏

小粥部長

中村社長

し、自らの会社で意欲を示した人の一人が中村社長である。現場を離れ、中村組本社で今後の本工事に向けた方針を中村社長、小粥部長、そして監理技術者になる寺田智秋と開いたと聞いた。いまだきつい、立派な父親像である。

また、子供のころから父親によく現場に連れて行かれ、何も分からなかったが、そこで楽しい思い出をした。この経験が父親の決めた進路に疑問を抱くことなく、いまにつながっている話には心から感動した。今後は、社員の家族、特にお父さんたちに、現場に来てもらう工夫をしてほしいと願った。

◇会社は家族、深い絆でつながる 中村社長の話も印象的だった。新入社員のリクルートに当たっては、社員が親類縁者友人に声をかけ、その子弟の入社を促す努力をしているとのことである。会社の誇れる点を聞くと、『社員一人ひとりが真面目に仕事に取り組み、熱意を持ち、堅い仕事をしている』との答えであった。現場を思ふ心意気に、久し振りにすがた。

議論の時でも中村社長、小粥部長、寺田課長の目の輝きはすばらしいものがあり、その輝きの奥には、先代中村社長の姿が見えた気がした。仕事への情熱はもとより、現場で働く人を大事にされた先代社長の魂が、いまの会社にも脈々と受け継がれているのを感じ、胸が熱くなる思いであった。『すばらしい仕事を期待しています』と、その言葉を送り、雨の浜松を後にした。

浜松市沿岸防潮堤整備事業

地元に戻ってほしい。浜松市創業の大手住宅メーカー、一条工務店グループの寄付金300億円をもとに、同市沿岸域で最大クラスの「レベル2津波」相当に対応できる防潮堤の建設が本格化しようとしている。

2012年6月に同社と静岡県、浜松市の3者は、防潮堤整備に関する基本合意を締結。県が工事を担当し、市が必要な土砂を提供することなどが決められた。

工事区間は、浜名湖入り口東岸から天竜川西岸までの約17.5km。早期完成を目指すため、用地買収が不要な保安林区域の官地内に防潮堤を築くことにした。高さ13%程度の長大堤が後背地の安全・安心を守る。

建設に当たっては保安林の再生が可能で、津波や地震に対しても十分な強度を持つ「CSG工法」を採用する。CSGは土砂とセメントを混合したもので、近年はダム工事でよく使われている。

この現場では、約25%離れた阿蔵山の土砂をCSGの母材としつつ、現地の浜砂も活用する。これにより、運搬土砂の全体量を3割程度削減できるといふ。

防潮堤のコアとなるCSGの幅は約20%。一定区間ごとに、現場で製造したCSGを順次敷き詰め、最終的には40層程度を積み上げて高さ13%のCSG堤を築く。一部区間は堤高を15%まで引き上げる計画だ。その後、周囲に盛土・覆土を施し、防風・防砂、潮害防備だけでなく、環境・景観に配慮した市民憩いの場となるよう樹木を植える。

県が試算したレベル2津波に対する防潮堤の減災効果によると、何もなければ1,468名に及ぶとされる宅地の浸水区域は、270%へと約8割低減できる。ほとんどの区域は浸水深2m未満に抑えられ、2m以上の区域は実に98%低減を見込む。